



TITLE:

吉田城さんに捧げるモノローグ (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

大浦, 康介

CITATION:

大浦, 康介. 吉田城さんに捧げるモノローグ (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究 2006, S: 418-420

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138028>

RIGHT:

吉田城さんに捧げるモノローグ

大 浦 康 介 Yasusuke OURA

四月一日である。こんな嘘くさい日にもものが書けるわけがないと、もういちど蒲団をかぶって寝ようとして、そういうわけにもいかないと思い返した。小黒君からいわれていた追悼号への寄稿の締切りである三月末をついに過ぎてしまったのである。小黒君が慇懃だがじつは凄腕の借金取りのように思えてきた。あの静かな物腰でどこかの闇からぬっと現われそうである。小黒おそるべし。こわいこわい。大黒、小黒、だいたいこういう名前の輩は狙った的は絶対はずさない。どこにいったのかと思っていると、たいていいつのまにかゴール前で待機している。そうだ、待機しているのだ。そして頑として動かない。そのうちなんとかしますから今日のところはお引き取りくださいといっても無駄なのである。帰れ、といっても帰らない。日が暮れても、夜が明けるころになっても、そこにいるのである。もう試合はとっくに終わっているというのに、まるで世界は〈永遠のロスタイム〉のなかにあるかのように、そこに突っ立っているのだ。ああまいったまいった。小黒には負けました。

というわけで重い腰を上げた。というど勿体ぶっているようだが、そうではない。吉田さんについて書きたくないわけではない。書けないのである。この数ヵ月、僕なりにいろいろ考えたのだが、そこだけ血流がブロックされているかのように筆が動かなかった。口頭でも吉田さんについて語ったことはほとんどない。こないだの仏文の追いコンの席で小黒君にも言ったのだが（また小黒だ）、要するに僕は、吉田さんはああだった、こうだったと、内容はともかく、〈過去形〉で語りたくないのだと思う。そうする踏ん切りがつかないのだと思う。ものごとがまだ分類済みではない（affaire classéeになっていない）現在形のあいまいさのなかにもう少し、もう少しだけ浸っていたいのだと思う。吉田さんの死はまだあまりに近すぎるから。しかしそんなことをいえば、ここに寄稿されている方々みんな同じ気持だろう。それでも書くのである。それが大人の態度というものだ。人は死んでゆく。でも社会は回っていかなければならない。だから俺も書くよ、小黒君、きっと書く。そのうち書く。たぶん書く……。そんなことまで言ったかどうかは定かではないが、小黒は僕の話を神妙に聞いていた。しかし別れぎわに「原稿よろしくお願いします」と言うことも忘れなかった。さすがだ。僕は小黒の足音を聞いたことがない。彼は足音を立てずに歩くのかもしれない。声も小さいし、彼を取り巻く半径五メートルは

さぞかし静かであることだろう。今日はどうも小黒ネタから脱け出せそうにない。

僕にはこれまでに影響を受けた人というのが何人かいる。吉田さんもその一人だ。学問内容上の影響ではない。研究者としての姿勢のようなものである。しかしこの点では、影響を受けたと言うのはおこがましいだろう。僕が言うまでもなく、吉田さんは驚異的な仕事人だった。この道の本当のプロだった。次々と仕事をこなし、新分野の開拓にも余念のない人だった。身体的に高い代償を払っていたともいえるかもしれないが、それは結果論にすぎないと思う。吉田さんにはあのようなありかた以外なかったような気がする。僕はいつも目を丸くして吉田さんの仕事ぶりを眺めていた。影響を受けたとはいえないが、大いに啓発されたことはたしかである。

もっと深層において感化されたのは、吉田さんの生きかたというか、人との接しかた、社会生活における身の持しかたのようなものである。世の中にはちゃんと社会化されていない人間が意外に多く、その点では大学もけっして例外ではない。驚くことに廊下ですれちがっても挨拶ひとつできない人間がいる（学生のことではない）。自分の心理状態をコントロールできず、不機嫌や鬱を平気で他人にぶつける人間がいる（これこそ暴力でなくて何だろうか）。吉田さんはさしずめその対極にいるような人だった。人とほどよい距離を保つということはもとよりそんなに簡単なことではない。あらゆる人とつねにほどよい距離を保つということももっとむずかしい。しかもそれでいてけっして自分を閉じることなく、冷淡でも、シニカルでも、偽善的でもない——吉田さんはそれができる人だったように思う。変な言いかたかもしれないが、僕は吉田さんのなかに「公人」というもののひとつの理想的なありかたを見ていたような気がする。

吉田さんはたしかに「公人」だった。しかも血の通った、きわめて人間的な「公人」だった。吉田さんはあくまで吉田さんらしくありながら、みんなにとっての吉田さんだった。その二つがなめらかに、シームレスにつながっていた。吉田さんは僕の一年先輩だが、僕は吉田さんといて緊張や気まずさというものを感じたことがない。僕の見る吉田さんはいつも驚くほど謙虚で、ユーモラスで、やさしかった。たまに闘病の疲れが顔に現われることがあっても、僕の記憶のなかでは、あのいたずらっ子のような笑みが絶えることはついぞなかった。そしてそんな吉田さんは文句なくカッコよかった。

吉田さんに会いたい。この誰に向けて書いているのかよく分からない文章をここまで書いてきて、僕が本当にいいたいのは結局このことだけだと感じる。

かなうものなら、吉田さんにもう一度お会いしたい。お会いして、とりとめのないおしゃべりに時間を忘れたい。しかしこの辺でやめよう。小黑君、こんなところで勘弁してくれ。僕はやっぱり君にいいボールを蹴り返してあげることができなかった。君はそれをすかさずゴールめがけて蹴り込むが、僕のパスミスのせいで大きく枠をはずす。君はがっくり膝をつき、頭をかかえて天を仰ぎ、それからうなだれる。すまん、小黑。

(おおうら・やすすけ 京都大学人文科学研究所教授)